



# ふたはの桂

京都府大広報 **No.184** | 2019.10

KYOTO PREFECTURAL UNIVERSITY



2019年4月、  
和食文化学科を開設しました



## 特集 2019年4月、和食文化学科を開設しました… 2

### CONTENTS

地域連携・地域貢献… 4 公開講座・生涯学習… 6 国際京都学… 7 国際交流… 8

### 各学部・研究科の取り組み

文学部… 9 公共政策学部… 9 生命環境科学研究科… 10

受賞情報… 11 イベント情報… 11 ニューフェース… 12 ふるさと納税のご案内… 12



## 特集

### 2019年4月、和食文化学科を開設しました

和食文化学科はこの春、1回生36名を迎え、文学部の4番目の学科としてスタートしました。授業は順調に進んでいます。最初はとまどっていたラーニングcommonsでの自主学習も活発になってきています。7月7日には、多くの方にご来場をいただき、本学科の開設を記念しての国際京都学シンポジウムが開かれました。オープンキャンパスも満席となり、多くの高校生の皆さんに関心をもっていただいています。



## 和食文化学科の食の学びの特徴

### ①文系と理系を横断して食を学びます

和食文化学科の学びの大きな特徴の一つは「文理融合」です。「食」を学ぶと言えば、栄養や食物、健康といった名前の付く理系の大学を思い浮かべますが、私たちは、「食」を「食べ物」という「物」として見るだけではなく、長い歴史の中でのうつりかわりや、それらに託されてきた思いや感性についても、言葉や文章から学んでほしいと願っています。一方で、和食文化を深く学ぶには、当然、食の学びの基本である理系の素養が必要です。文学部の中の学科ですが、理系志望の方にも興味をもってほしいのです。むろん得意、不得意はあるもの。万能選手を求めているわけではありません。苦手なものにもチャレンジしてみよう— そんな人に来ていただきたいと思います。



## ②フィールドワークを重視します

和食文化学科のもうひとつの特徴は、料理人、農家、産業界の学外講師の方が大勢授業に来られることです。和食文化の継承、発展という課題に向き合う「食の当事者」の声を生で聞くことができます。食に関わる職種は多岐に及びますが、どんな分野にも欠かせないのが、違う立場、多様な考えの人びととの間のコミュニケーション。そのコミュニケーション力を鍛えるのがフィールド科目です。フィールドワークの基礎からみっちり学びます。1回生の前期では教室を飛び出し、インタビューの方法や発信の方法なども学びました。京都ならではのフィールドもたくさんあります。



大学周辺の飲食店マップ



大原特産「柴漬け」のガイド

## 学生の声

1回生 栗田 桃歩

和食文化学科に入学して、4ヶ月が経ちました。どうせ勉強するのなら人と違うことを学びたいという純粋な好奇心で和食文化学科を受験した私ですが、とても充実した大学生活を送ることができています。

理系の授業はまだ無いのですが、食について多角的に学べるカリキュラムのもとで、他の大学・学部ではできない学びがたくさんあります。例えば、菊乃井の3代目主人村田吉弘さんやキッコーマンの社員の方々、大原の農家の方々など、食に実際に携わる方々に授業をして頂きました。座学だけでなくフィールドワークにも数多く出かけました。進路については、前例がないこともあり不安もありますが、必ずしも和食に関係する進路に進まなければならない訳ではありません。私は、和食文化学科での学びは人生の質をあげるものだと考えています。1期生一同、来年の春、新入生の皆さんをお待ちしています！

## こんな時は？

### オープンキャンパスや進学説明会に行くことができなかつたが、質問したい！

こんなことを相談したい、聞いてみたい、という場合は、随時個別に対応しています。

shmori@kpu.ac.jp (学科主任：母利司朗) まで、まずは御連絡ください。



## 地域連携・地域貢献

### ■ H30年度 地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果報告

京都府立大学では、京都府内の地域振興や産業・文化の発展等に貢献することを目的として、地域貢献型特別研究 (ACTR) を実施しています。その研究の一環で、学生達が協力した昨年度の活動をご紹介します。

### 南丹市美山町大野での木のものづくりとえほん作成の活動

生命環境学部 環境デザイン学科 4 回生 手島 悠登

美山木匠塾は南丹市美山町大野を拠点として活動しており、毎年、地域間伐材を利用した木工作品 (遊具、やたい、移動式茶室等) を製作しています。製作活動は、まず地域の方へのヒアリング (4-5月) から始まります。その内容をもとに案を企画し、地域の方へプレゼンをします。そこでいただいた意見をもとに改良をし、製作は地域の公民館をお借りして行っています。完成した製作物を地域の運動会 (10月) にてお披露目し、実際に使っていただきます。製作物は、東京でのイベントや地域でのお祭りでも活用しており、またコンペにて多数受賞しています。

そして現在、ACTRの一環で、地域を題材としたえほん作成をしてい

ます。地域を知り、より地域に見合った製作物をつくるため、また地域の方に地域の魅力を再び知っていただくために行っています。2017年度に作成したリーフレット「めぐって、感じるおおのさんぽ。」をもとに、2018年度に第一弾を作成し今年度も引き続き行っています。製作物やえほんのコンセプトや形、ストーリーを考えることは大変ですが、それらを通じて地域の方などが喜んでくださっている様子に、やりがいを感じています。より良いものをつくれるように、今年度も頑張っていきたいと思います。



食事をしながら、地域の方に活動紹介をしている様子



製作した遊具で地域の子も達が遊んでいる様子



製作物の案を地域の方にプレゼンしている様子

### 京都市左京区久多地区の紹介リーフレットと動画を作成しました

文学部 歴史学科 4 回生 中江 瑛、山中 真琴

生命環境学部 農学生命科学科 4 回生 湯川 璃子、3 回生 林 奈津子

森林科学科 3 回生 二宮 亜由美

私たちはACTRの一環で、久多オリジナルのどぶろく「<sup>くたびより</sup>久多日和」の醸造に合わせて、どぶろくに関する知識と久多地域の魅力を発信するための冊子と動画を作りました。

これには歴史学科・農学生命科学科・森林科学科の5人が有志で集い、一致団結して取り組みました。冊子の作成に当たっては、専攻の違いを活かして、様々な視点から見た久多地域やどぶろくについて記すことを目標とし、それぞれが現地調査や文献調査を行いました。そして、定期的にミーティングを行うことでお互いの進捗状況の把握や、完成に向けてのスケジュール調整を行い、着実に完成へと進めていきました。

また、酒米である「京の輝き」を栽培する水田で田植えや稲刈りのお手伝いをする中で、生産工程にも携わりました。このような経緯で作上げた冊子を読むと、久多の歴史や伝統的な祭りに関して、どぶろく自体や酒米の「京の輝き」、久多の歴史ある林業について知ることが出来ます。動画では、久多で撮った四季の写真や映像を用いて、どぶろくができるまでを視覚的にわかりやすくまとめています。ぜひ私たちの作った冊子や動画を見ながら久多日和を味わっていただき、久多の景色を思い浮かべながら楽しいひと時を過ごしてください。



リーフレット「京の輝き」をつかったどぶろくゆるりと久多日和」



花笠踊りの様子



田植えの様子



稲刈りの様子

\*動画



## ■ COC+学生チームの活動「黒谷和紙作り」

公共政策学部 福祉社会学科 2回生 上野 信順  
 生命環境学部 農学生命科学科 2回生 尾島 あかり  
 森林科学科 2回生 増田 あすか

私たちは、COC+教育プログラム（地域創生について学ぶ教育プログラム）の受講をきっかけに、京都府中・北部の固有の生業に関心を持ち、もっと地域での活動に貢献したいという思いから発足した、COC+学生チームです。メンバーは2回生から4回生までの10人くらいです。

2019年6月、京都府綾部市で、伝統的な手漉き和紙の技法を守り続ける黒谷和紙協同組合の方々をうかがいました。理事長の林伸次さんから直々に、黒谷和紙の生産現場を案内していただき、和紙の原料「楮」の手入れ作業に参加しました。

和紙には、楮の幹の白皮を使います。そのため幹を太く育てるために脇芽を摘む作業が必須です。実際に取りかかると、芽かき

自体は単純作業でしたが、徹底して摘むために集中力を要し、さらに降雨により足場が悪く、すごくハードな作業に感じました。

午後に訪れた「黒谷和紙工芸の里」では、黒谷和紙の作業工程を一から見て回り、紙漉きの体験もする中で、全工程にかけられている時間と手間に圧倒されました。その黒谷和紙をただ販売するだけでなく、和紙で作る糸や名刺入れ、クッションのように、常に新しい活用方法を提案してきたことが、今も黒谷の文化として根付く理由だと林さんから教わりました。

12月頃には、大きく育った楮を刈り取る作業ができる予定です。それまでに体力をつけて臨みたいと思っています。



和紙の原料「楮」の芽かき作業



紙漉きの体験



和紙のハガキ

## ■ 森林ボランティアサークル森なかまによる地域密着型竹林整備・竹育プロジェクト

生命環境学部 森林科学科 3回生 久保田 裕介

森なかまでは「京都府立大学を日本で一番森林に興味のある学生が多い大学にすること」を目標に、森林・竹林整備や環境教育、地域活性化に関わるボランティア活動を行っています。部員数は100名を超え、森林科学科の学生はもちろん多様な学科の学生が所属しており、学生間の交流の場にもなっています。サークル設立から18年になりますが、これまで京都府や京都市をはじめとした行政機関や様々な地域団体とも連携して活動を行ってきました。それら活動の中で、子どもの自然体験の頻度の低下や荒廃竹林問題などの地域課題を実感する機会があり、これまでの経験を生かして課題解決につなげたいという思いに至りました。そこで、(公財)大学コンソーシアム京都の2019年度「学まちコラボ事業」に応募した結果、森なかまの提案した「地域密着型竹林整備・竹育プロジェクト」が採択されました。本プロジェクトでは、森なかまと地域の市民活動団体であるNPO法人京都発・竹・流域環境ネットおよび地域の事業者である(株)竹定商店とが「コラボ」(連携・協働)して、地域の方々にとって自然がより身近になることを目標に、竹林の景観を改善し維持する活動、また、地域住民の親子を対象とした木(竹)工体験イベントの開催などに取り組んでいきます。



竹林整備の様子



流しそうめん作りの様子



## 公開講座・生涯学習

### 公開講座「桜楓講座（春の部）」を開催

6月8日は、生命環境科学研究科の椿一典教授の講演「よろず作ります～化学を使って役に立つものを作る～」。約90名のみなさまに受講いただきました。私たちの身の回りのほとんどのものは、石油から合成された化学物質から作られており、化学を正しく理解し、利用すれば大きなメリットを得ることができます。当日は、有機化学の構造式の書き方や匂いの認識に関する解説に加え、受講者のみなさまに実際に様々な化合物のサンプルの匂いを嗅いでいただくなど、化学の魅力を感じる機会となりました。

6月29日は、文学部の鳴海伸一准教授の講演「『方丈記』を読んで日本語の歴史を考える」。約130名のみなさまに受講いただきました。「方丈記」は著名な古典ですが、部分部分の解釈を日本語の歴史という観点から考察することによって、ことばの変化について考えることもできます。当日は、方丈記に出てくる文章の解釈や構造を通じた日本語（ことば）の歴史（変化）について解説があり、日本語学や日本語史を学ぶ機会となりました。



6/8講座の様子



6/29講座の様子

### 演習林野外セミナーを開催しました

#### — 森林科学科で学べる幅広い分野の実習を演習林で体験！ —

7月21日に演習林野外セミナー 高校生のための『大学の森・森林科学 野外実習コース』@大野演習林 を開催しました。

これはオープンキャンパスの関連行事として森林科学科と演習林が共催で行ったもので、森林科学科の野外実習を参加者に模擬体験してもらいました。

当日は参加者34名（高校生31名、一般の方3名）と森林科学科教員等が南丹市美山町脇谷の大野演習林に大学バスで出かけ、演習林職員が新たに開設した散策路を歩くなど以下のプログラムを行いました。

- ◆ 演習林紹介（講師：高原教授）
- ◆ 木材加工施設案内（講師：古田教授）
- ◆ 森林散策と樹木観察  
（講師：高原教授、松谷客員教授、平山准教授、上田准教授）
- ◆ 溪流の水質調査（講師：勝山教授）
- ◆ 溪流・溪畔林解説（講師：三好助教）

今回は、森林や樹木、木材、溪流、水など森林を取り巻く様々な分野の実習を体験できたこともあり、セミナー後のアンケートでは『森林科学とはいろいろな学問が組み合わさった学問だということを感じた』、『それぞれの分野を魅力的に感じた』、『わかりやすい言葉での説明が良かった』といった感想が数多くありました。



## 国際京都学

## ■ 「京都の歴史を歩こう! 粟田口編」を開催しました

文学部 歴史学科 4回生 藤澤 愛

毎年文学部歴史学科では、京都学・歴彩館と共同で「京都の歴史を歩こう!」という京都府民の方向けの遠足を企画しています。昨年は粟田口編と題し、地下鉄東西線蹴上駅から同東山駅までを、ねじりまんぼ、蹴上インクライン、蹴上発電所、鍛冶神社、相槌稻荷神社、並河康之七宝記念館、竹中精麦所跡の順番で見学し、粟田口という地域の特徴について理解を深めました。

この活動では歴彩館の職員の方のご協力もいただきながら、遠足の計画・準備・実施までを学生主体で行います。遠足で立ち寄る場所については、歴彩館所蔵の書籍や史料を用いて調査を進め、また当日の解説もパネルで写真や資料を掲示するなどの工夫をすることで歴史学科ならではの正確で分かりやすい説明を心がけました。

今回の活動は、自分たちの知識を試行錯誤しながら一般の方々に伝えることを通じて日頃の大学での学びを府民の方に還元することができたという点でとても貴重な経験であったと思います。同時に、歴史を学ぶことへの意欲をより高めることができるものであったと感じています。



## ■ 京都学・歴彩館の京都学ラウンジにおいてポスター展示を行いました

文学部 歴史学科 2回生 原田 宗周

本年7月1日から31日までの間、京都学・歴彩館の京都学ラウンジにおいて、歴史学科の希望者が京都学・歴彩館所蔵の資料を紹介する、ポスター展示を行いました。2回生から卒業論文作成を意識して研究に必要な力をつけることを目的にして始めました。資料やテーマが与えられるのではなく、一から作業を進めた初めての経験でした。

私は幕末における欧米諸国の接近についてをテーマにしました。紹介した資料2つの内1つは絵図にして、より興味を持ってもらえるようにしました。絵図はペリー来航時の浦賀の様子を描いたもので、もう1つの資料は開港直後の横浜の情勢が書かれたものです。特に難しかったのは、幕末の大きな出来事を取り扱ったため、詳しく知っている方にも、逆によく知らない方にも興味を持って見てもらえるように、解説文の作成・推敲をすることでした。

ポスターの展示まで大変なこともありましたが、歴彩館職員の方や、先生方のご指導もあり、完成に辿り着くことができました。正確さはもちろん、わかりやすさにも細心の注意を払い、試行錯誤を繰り返しました。大袈裟な言い方ですが、単なる自己満足ではなく、自分が行っている研究の成果を世の中に還元するという意識の大切さを改めて実感しました。3回生以降の研究に向けての良いスタートダッシュになったのではと思います。





## 国際交流

## ■ ラヴァル大学 (カナダ) 留学体験談

生命環境科学研究科 環境科学専攻 博士前期課程2回生 古川 修平

私は2019年の1月から4月にかけてカナダのケベック州にあるラヴァル大学に留学させていただきました。私は高校生のとき国際文化科という学科に所属していて、英語を中心に勉強していました。そこで、今回のお話を頂いたときに、その英語力を使ってみたいと思って留学することを決めました。私の研究は森林のレーザー計測なので、留学中はそのソフトウェアを開発しておられる方の研究室へ所属させていただきました。ケベック州はフランス語圏なので、英語の発音が少しフランス語に近い発音になっていました。そのため、うまく言葉を聞き取ることができず、苦労することがありました。しかし、研究室の方々はとても親切で、Snowshoeingにも参加させていただきました。Snowshoeingは雪の中を歩くハイキングのようなものなのですが、私にとっては全く経験のないことで写真のような景色を見られたのでとても楽しく思い出に残っ

ています。私は今回の留学を経て、英語でのコミュニケーションは熱意さえあれば話を聞いてもらえるので気持ち

が大切だと改めて知りました。今後は今回の留学で学んだことを生かして研究を続けていきたいと思います。



## ■ マッコリー大学 (オーストラリア) 留学体験談

文学部 欧米言語文化学科 2回生 岩切 瞭

私は世界遺産都市研修というプログラムでオーストラリアのマッコリー大学に一月留学しました。もちろん語学留学という目的で行ったので英語力の成長もありましたが、それ以上に精神的、人間的に成長できたと感じます。実際に私のオーストラリアでの生活の幕開けは大波乱でした。というのも、恥ずかしいことに初日からいきなり大学へ行くバスを乗り間違えてしまったのです。焦りながらも、私はバスの運転手さんや乗客の人たちにどこで降りて、どのバスに乗ればよいのかを聞き、何とか無事に到着できました。しかし結果的に、このハプニングのおかげで英語を話す度胸はつきました。その後は、このピンチを超えるものはなく、楽しく過ごせました。

平日の午前中は、主に大学近くのショッピングセンターやカフェを巡り、午後からは大学で授業を受け、放課後にはマッコリー大学のサークルにお邪魔してもらいました。休日にはシドニーの中心部やビーチなどへの遠出の観光を楽しみました。滞在の半分が過ぎたころには、現地の生徒とも友達になり、一緒にランチを食べに行き、今でもメールのやり取りをするほどの仲になりました。このようにオーストラリアでは本当に充実した一月を過ごすことができました。





## 各学部・研究科の取り組み

## 文学部

東京オリンピックとペルシア戦争  
—2020年の交差—

歴史学科 阿部 拓児 准教授

いよいよ東京オリンピックまで1年を切りました。スポーツの祭典として知られるこのイベントは、今から2800年近く前に古代ギリシアのオリュンピアという聖域で始まった、競技会をとまなう宗教行事をモデルにしています。とはいえ、古代のオリンピックと現代のそれとは違いも大きく、古代ではおこなわれていなかった競技も近代になって取り入れられています。古代オリンピックでは球技や水泳種目はなく、もっぱら陸上競技と格闘技がおこなわれていました。また、近代の陸上競技の花形であるマラソンは、古代ギリシアと関係しつつも、古代にはスポーツとして存在していませんでした。

紀元前5世紀の初頭、いまのイランを中心に勃興したペルシア帝国という強大な国家が、海を渡ってギリシアへ攻め入りました。ペルシア戦争と呼ばれる事件です。このペルシア戦争中の合戦の一つであるマラトンの戦い後、

- ギリシア軍勝利の知らせを一刻も早く伝えようと無休で走り続けた伝令使が、任務を果たした途端に息を引き取ったと伝えられています。このエピソードをヒントに、近代に入ってから作られたのがマラソンです。2020年は実は、ペルシア戦争(テルモピュライの戦い、サラミスの海戦)から数えて2500周年にも当たります。私はいま、この節目の年にあたって、ペルシア戦争がその後の歴史に与えた影響を見てみたいと考えています。もちろん、東京オリンピックをテレビで観戦しつつ、ですが。



マラトンの古戦場と兵士の塚

## 公共政策学部

大人の事情に左右される子どもの利益確保～  
家族内の実質的平等を実現するために

公共政策学科 佐藤 千恵 准教授

私の専門分野は家族法です。主に子どもの監護法制について研究しています。

「子の奪い合い」ということばをご存知でしょうか。両親の仲が悪くなり別居または離婚となったとき、その後どちらの親が子どもを監護養育するのか等を取り決める必要が生じます。しかし、実際には、これらを取り決めない、または取り決められないまま、一方の親が子どもを連れて家を出てしまったり、一方の親の元にいる子どもをもう一方の親が連れ去ってしまったりすることがあるのです。これが「子の奪い合い」です。このとき、子どもは、親の板挟みとなり苦悩するだけでなく、新たな環境に突然移され、親しい人たちとの関係も切断されることになり、大きな精神的ダメージを被ります。また、子の引渡しを求める裁判が長期化し、ようやく子の返還が命じられた際には、順応した新たな環境からの離脱を再び強いられるので、子どもにとってさらなる負担となることもあります。国境を越えた子の奪い合いに関しては、「国際的な子の奪取の民

- 事上の側面に関する条約(いわゆるハーグ条約)」の加盟国間の場合(日本では平成26年発効)、連れ去られた子どもの即時返還が原則となりますが、原則どおりの返還が難しい場面も多々みられます。

やはり子の奪い合い自体を予防していくという視点が不可欠です。現在、私は、そのような視点から、民間の専門団体と公的機関が連携し家族を早い段階から支援するイギリスの取り組みについて調査研究を進めています。今後も家族内の実質的平等を実現できるような監護法制、家族法のあり方について考えていきたいと思っています。



イギリスCafcass:  
民間団体と連携し子どもを支援する機関Cafcass  
(Children and Family Court Advisory Support Service) 本部の玄関

## 各学部・研究科の取り組み

### 生命環境科学研究科

#### 天然の機能を超える人工タンパク質の設計技術の開発と応用

応用生命科学専攻 生命構造化学研究室  
田中 俊一 准教授

私たちのカラダの中では、酵素や抗体といったタンパク質で組み立てられた小さな分子がせっせと働いています。いろいろな物を切ってくっ付けて、エネルギーをカラダに供給したり、カラダにとって悪いものを識別して排除したり。これらの働きによって、私たちの生命活動は維持されています。

一方、酵素や抗体はカラダの外でも活躍していて、身近なところでは食品の加工や衣料用の洗剤、ちょっと特殊なところでは病原性大腸菌O157の検査や糖尿病の診断に使われています。それ以外にも、医薬品合成、化粧品、繊維加工、製紙加工、環境浄化などなど。活躍の場はとても広く、カラダの外でも私たちの生活を支えてくれています。今後ますますの活躍が期待されますが、実は課題もあります。それは、自然界から得られる天然の酵素や抗体では能力が不足していて、そのままでは使えないケースが多いということです。

そこで私の研究では、酵素や抗体を人工的に改変して能力を高めたり、その改変を効率良く行うための新しい技術を開発しています。2018年のノーベル化学賞受賞となった進化分子工学やファージディスプレイ法(注:私が受賞者ではない)を基盤に、異分野の技術とも積極的に融合させながら研究を進めています。狙い通りに改変がうまくいった時の充足感と、改変した酵素や抗体の実用を通してヒトの生活の役に立つという社会への貢献意識が、私の研究のモチベーションに繋がっています。さらに、これまで自然界になかったような酵素や抗体の創出を通して、タンパク質の未知の可能性を探求できる面白さも、本研究の醍醐味です。



研究で使用する機器  
機能の変わったタンパク質を  
(上) 選別して、  
(右上) 精製して、  
(右) 解析する。

### 生命環境科学研究科

#### 食品ロス削減に向けて地域と連携して研究する

環境科学専攻 環境配慮型生活学研究室  
山川 肇 教授

近年世界では、生産された食料の約1/3が食べられずに失われており、大きな問題になっています。そこで国連も日本政府も2030年までにこれを半減するという目標を立てました。しかしその道筋はまだ見えていません。

本研究室では、容器包装から衣類、住宅に至るまで、生活の中で使われる大きささまざまなモノについて、その環境影響や削減行動などについて研究を行ってきました。従来は食品の研究はあまりしていませんでしたが、上記の課題を受けて、現在、ACTR(地域連携研究を支援する京都府立大学のしくみ)を活用して京都府精華町と連携し、地域の食品ロス削減の研究に取り組んでいます。

まずごみに含まれる食品の種類と量を調べるとともに、ごみを見るだけではわからない捨てた理由について日記方式で調べました。ごみの中の「手つかずの食品」の例を写真で示しています。このようにしてわかった食品ロスの

実態を踏まえて、協力いただいた町民の方に削減行動を提案しその取り組みをお願いしたところ、その前後でおよそ4割の食品ロスが削減できました。こうした結果を踏まえて、現在、精華町と協働で食品ロス削減キャンペーンの研究に取り組んでいるところで、その結果は政策提案につなげていく予定です。これらは学生の卒業研究として行っています。研究室としては、今後も地域と連携し、学生とともに地域の課題に取り組む研究を進められればと考えています。



約40世帯・4日間の燃やすごみ中の「手つかずの食品」  
撮影：スタジオ北山山荘 神谷潔





## 受賞情報

### 文学部

■日本・中国文学科 藤本 灯 講師  
**平成30年度田島毓堂語彙研究基金「学術賞」受賞**  
 平成30年度田島毓堂語彙研究基金において、「色葉字類抄」の研究により、「学術賞」を受賞しました。

### 生命環境科学研究科 応用生命科学専攻

■岡 真優子 准教授(食環境安全性学研究室)  
**第92回日本細菌学会総会選抜ワークショップ「優秀賞」受賞**  
 第92回日本細菌学会総会選抜ワークショップにおいて、「大腸菌とマクロファージの細胞外小胞を介した相互作用による炎症因子の誘導機構」の発表により、「優秀賞」を受賞しました。

■博士前期課程2回生 天野 泰輔さん(応用昆虫学研究室)  
**関西昆虫学研究会2018年度研究発表会「若手発表賞」受賞**  
 関西昆虫学研究会2018年度研究発表会において、「発現比較による虫こぶ形成因子の探索：ホンガ科3種間での比較」の発表により、「若手発表賞」を受賞しました。(受賞時：博士前期課程1回生)

■博士前期課程2回生 中林 ゆいさん(応用昆虫学研究室)  
**第66回日本生態学会大会「ポスター賞」受賞**  
 第66回日本生態学会大会(神戸大会)において、「寄生蜂はアリ防衛の穴を見抜けるか?：ムラサキシジミを例に」の発表により、「ポスター賞」(優秀賞)(行動/behavior部門)を受賞しました。(受賞時：博士前期課程1回生)

■博士前期課程2回生 内富 蘭さん(分子栄養学研究室)  
**第73回日本栄養・食糧学会大会「学生優秀発表賞」受賞**  
 第73回日本栄養・食糧学会大会において、「大豆インフラボンは筋細胞においてPGC-1βを介したエネルギー代謝関連遺伝子の発現を促進する」の発表により、「学生優秀発表賞」を受賞しました。

■博士前期課程2回生 神崎 千沙子さん(機能分子設計化学研究室)  
**第17回ホスト-ゲスト超分子化学シンポジウム「優秀ポスター賞」受賞**  
 第17回ホスト-ゲスト超分子化学シンポジウムにおいて、「定常的なエネルギー供給により表現する高活性超分子の創製とその速度論的安定化」の発表により、「優秀ポスター賞」を受賞しました。

■博士前期課程2回生 千賀 明香音さん(生命物理化学研究室)  
**第66回日本生化学会近畿支部例会「優秀発表賞」受賞**  
 第66回日本生化学会近畿支部例会において、「PET分解酵素 Cut190の機能と安定性に与える二価金属イオンの影響」の発表により、「優秀発表賞」を受賞しました。

■博士前期課程1回生 浅野 優希さん(微生物機能化学研究室)  
**第508回日本農芸化学会関西支部例会「優秀発表賞」受賞**  
 第508回日本農芸化学会関西支部例会において、「degP遺伝子破壊による*Meiothermus ruber* H328珠の膜小胞産性能向上に関する研究」により、「優秀発表賞」を受賞しました。

### 生命環境学部/生命環境科学研究科 環境科学専攻

■宮藤 久士 教授(森林資源循環学研究室)  
**「第59回日本木材学会賞」受賞**  
 第59回日本木材学会において、「木材利用へのイオン液体の応用」の発表により、「学会賞」を受賞しました。

■平成31年3月博士前期課程修了 米澤 政人さん(建築意匠学研究室)  
**平成30年度キッチン空間アイデアコンテスト「奨励賞」受賞**  
 平成30年度キッチン空間アイデアコンテスト(主催：公益社団法人インテリア産業協会)において、「マチノダイドコロ」の発表により、「奨励賞」を受賞しました。(受賞時：博士前期課程2回生)

■平成31年3月環境デザイン学科卒業 北岡 佳奈さん(建築意匠学研究室)  
**平成30年度キッチン空間アイデアコンテスト「奨励賞」受賞**  
 平成30年度キッチン空間アイデアコンテスト(主催：公益社団法人インテリア産業協会)において、「通り土間で繋がる3世帯の食卓」の発表により、「奨励賞」を受賞しました。(受賞時：生命環境学部4回生)

■環境デザイン学科4回生 島田 涼さん(建築意匠学研究室)  
**第12回インテリアプラン・コンテスト「最優秀賞」受賞**  
 第12回インテリアプラン・コンテスト(主催：インテリアプラン・コンテスト実行委員会)において、「のぼって、おきて。」の発表により、「最優秀賞」を受賞しました。(受賞時：生命環境学部3回生)

■平成31年3月博士前期課程修了 田中 季恵さん(生物材料物性学研究室)  
**第69回日本木材学会大会「優秀ポスター賞」受賞**  
 第69回日本木材学会大会(函館大会)において、「水・エタノール混合溶液で膨潤した木材の熱軟化特性」の発表により、「優秀ポスター賞」を受賞しました。(受賞時：博士前期課程2回生)

■博士前期課程1回生 水口 仁人さん(ランドスケープ学研究室)  
 博士前期課程1回生 大杉 悟司さん(建築計画学研究室)

**令和元年度日本造園学会 全国大会・学生公開デザインコンペティション入賞(佳作)**  
 令和元年度日本造園学会全国大会・学生公開デザインコンペティションにおいて、「食べ物の通 SHOKUTSU -畑から器まで-」の発表により、入賞(佳作)しました。

■博士前期課程2回生 淡路谷 直季さん 他5名  
**第22回木材活用コンクール「第4部門賞」受賞**  
 第22回木材活用コンクール(主催：日本木材青壮年団体連合会)において、学術研究員の羽原 康成さん(環境心理行動学研究室)、博士前期課程2回生の淡路谷 直季さん(環境心理行動学研究室)、谷口 悠貴さん(住生活学研究室)、平成30年度環境デザイン学科卒業の鍵井 太貴さん、平成29年度環境デザイン学科卒業の平松 優生さん、向井 亜美さんが「KASANOKI」の発表により、「第4部門賞」を受賞しました。

## イベント情報

### 令和元年度桜楓講座(秋の部) <京都府公立大学法人連続講座>

最近のトピックスを交えながら、本学教員がそれぞれの専門分野についてわかりやすく講義を行います。

●11月9日(土) 10:00~12:00

『京都の多様な森林と大学の森~演習林~』

講師：生命環境科学研究科教授 高原 光

●11月24日(日) 10:00~12:00

『外国人労働者受入れの現状と課題』

講師：公共政策学部教授 中島 正雄

場 所 京都府立大学 教養教育共同化施設「稻盛記念会館」103講義室

受 講 料 無料(申込制)

募 集 期 間 11月9日開催・・・11月8日(金)まで  
 11月24日開催・・・11月22日(金)まで

申 込 先 〒606-8522(住所記入不要)  
 京都府立大学 京都地域未来創造センター  
 TEL：075-703-5390  
 FAX：075-703-4979  
 E-mail：kirpinfo@kpu.ac.jp

■**文学部 日本・中国文学科**  
**准教授** **竹島 一希**  
 <主な研究領域>  
 連歌

室町時代に流行した連歌という文学を研究しています。連歌の中には、それまでの日本・中国文学、歴史、宗教などあらゆるものが投げ込まれ、そこで新しく生まれ変わって次の世代に伝わったとしばしば言われます。連歌の文化史的重要性は周知ですが、しかし文学としての研究はほとんど進んでいません。作品を丁寧に解釈することを通して、文学としての魅力をまず知ってほしいと願っています。

■**文学部 欧米言語文化学科**  
**准教授** **山口 エレノア**  
 <主な研究領域>  
 国際文化交流



日英文化交流専門で、特に京都府知事を務めた中井弘の研究をしています。中井は1866年に英国へ旅しました。その際、旅日記を執筆し、帰国後に出版しました。私はその英訳をしました。1868年、京都で英国公使一行が明治天皇に初めて謁見する日に、攘夷派志士二人に襲撃され、中井はその一人と闘い、英国代表の命を救いました。ヴィクトリア朝英国を体験した中井は日英交流史の重要人物で、その人物の役割、意義、そして経験を探りながら日英文化交流を研究しています。

■**公共政策学部 公共政策学科**  
**講師** **秦 正樹**  
 <主な研究領域>  
 政治行動論、政治心理学、実験政治学



近年、全世界的にフェイクニュースの蔓延が問題視されています。日本でも、政治に関する陰謀論やフェイクニュースが（とくにSNSを中心に）散見されます。私は、こうした政治的な誤った情報（political misinformation）をSNSから網羅的に収集し、そのビッグデータの分析を行っています。また実際に、政治的誤情報に触れた有権者がどのような政治行動につながるのかについても、サーベイ実験と呼ばれる手法を用いて、その因果メカニズムに関する実験研究を進めています。

■**生命環境科学研究科 応用生命科学専攻**  
**教授** **半田 裕一**  
 <主な研究領域>  
 植物遺伝育種学



作物の品種改良は、人口増加や気候変動に対応した食料生産のほか、生活の質の向上に重要な役割を担っています。私が研究材料としているコムギは、イネ、トウモロコシと並ぶ世界三大穀物の一つとして世界の人々の生活を支える重要な作物です。私は、コムギの改良や安定的な生産の基盤となるゲノム情報整備を行い、2018年に国際研究グループとしてコムギのゲノム解読に成功しました。本学では、この基盤情報を利用して、コムギの持つさまざまな可能性に迫っていききたいと思います。

■**生命環境科学研究科 環境科学専攻**  
**准教授** **奥矢 恵**  
 <主な研究領域>  
 建築歴史・意匠学(特に、山岳地)



建築物は、地域固有の風土、生業、慣習等に影響を受けて成立してきました。なかでも、厳しい環境となる高山域において、人々の生命を保護し活動の基盤ともなってきた山小屋に着目し、その歴史と変容を研究しています。現在、多くが世界遺産や国立公園等の景勝地にあり、環境保護と利用の両立、歴史・文化の継承が求められています。こうした、地域性の豊かな建築物を対象に、歴史的価値の継承と現代的課題の解決をふまえた未来の在り方を探っています。

■**生命環境科学研究科 環境科学専攻**  
**教授** **勝山 正則**  
 <主な研究領域>  
 森林水文学



森林と水に関わる自然現象、特に、森林の長期的動態が水の循環過程や溪流の水質形成にどのように影響を与えるかを中心に研究しています。毎月のように観測フィールドに出かけては、水サンプルを集め、その水質変動から水の動きを考えています。また、視点を世界に向け、世界の地下水資源の現状把握を目的に、世界中で市販されているボトルウォーターを集め、その同位体比から世界の水循環を考えています。気候変動影響が深刻化する中、現在の状況はどの程度維持可能なのか、長期的視点で見えていくことが大切だと考えています。

## ふるさと納税制度を活用した府立大学への寄附金にご協力をお願いします!!

府立大学は、今年4月に、日本の伝統的な食文化を世界に向けて発信する「和食文化学科」を発足しました。今後ともさらなる発展に向け、本寄附金を魅力ある大学づくりのために活用させていただきます。次代を担う本学学生のために、ご寄附にご理解とご賛同を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

詳しくはチラシ・京都府又は府立大学ホームページでご確認ください。

ふるさと納税 京都府立大学

検索

【寄附者のご芳名】

この度、ご寄附をいただきました皆様に感謝申し上げます。

2018年 上野 勝代 様 小林 智宏 様 中島 正雄 様  
 中村 佐織 様 菱田 哲郎 様 山本 範子 様

2019年 青柳 浄隆 様 印藤 八郎 様 小石原 代司子 様  
 大同 武 様 鷹野 静代 様 中井 敏宏 様  
 林 弘明 様 平野 貴行 様 古井 哲朗 様  
 森本 智子 様 米津 太之 様

(掲載に同意いただいた方のみ掲載。五十音順)

※ゆうちょ銀行・郵便局・銀行からの振込、クレジットカードがご利用いただけます。

【寄附の状況】 2019年7月現在('18/11～)  
 合計 ¥2,373,000 (33件)